

|                       |                      |
|-----------------------|----------------------|
| 学部・研究科 Faculty/School | 学科・コース Course        |
| 保健学研究科                | パブリックヘルス領域<br>国際保健分野 |

(1) 見たこと/What you saw; (2) 考えたこと/What you thought; (3) 感じたこと/What you felt;  
 (4) ジェンダーに敏感な災害対策はどのようなものだと思いますか

サマープログラムではインドネシアガジャマダ大学での講義・演習に加え、郊外へのフィールドトリップから構成されていました。

フィールドトリップではインドネシア国のジョグジャカルタにある2つの地へ行きました。1つ目はジョグジャカルタの南に位置し、インド洋に面しているケマダン村です。この村は津波被害が多いことで知られており、ケマダン村の災害本部とバロンビーチのライフセーバー本部を見学しました。ケマダン村は、田舎であり、携帯電話などが手元にない時に、緊急で警告を知らせる場合についてどのように行っているか疑問に思いました。ケマダン村の災害本部で説明をいただいた方に質問をしたところ、現在はサイレンなども活用されていますが、昔からの伝統的な楽器のような道具があると説明してくれました。津波が起きる際などの緊急時に村人に危険を知らせるその器具は、太い竹の筒のような形で白と赤に塗られており、木の棒で叩いて音を出すものでした。それが、村のあちこちに設置されているとのことでした。想像していた以上に、器具の音はよく響き、遠くでも聴きやすく、警告の種類によって叩き方を変えているとのことでした。また、FPRB (disaster risk reduction forum) が作成した、20,20,20 のポスターは、20 秒間地震で揺れ、20 分後に津波が発生し、20 メートル以上の高さに避難するという内容を示したもので、数字は目を引き、イラストはインドネシア語が分からない私でも容易に理解ができ、記憶に残るものでした。緊急時には視覚的に記憶できるポスターが有効であると再認識しました。また、バロンビーチは、川と海が交差する珍しく、そして美しいビーチで、手前に川があり、砂浜を挟んで、奥に海があるという構成でした。ライフセーバーが監視をする建物からは海や浜の様子がよく見え、建物の外に設置されたカメラの画像もありました。海の様子は、風がないのに波は高く、波のブレイクも力強く、嵐の時は、さぞかし危険であろうことがと予測ができました。

2 つ目はジョグジャカルタの北部に位置するメラピ山の災害に関する地域でした。メラピ山は活発に活動している火山であり、2010 年に大規模な噴火が起こり、多くの犠牲者や避難者が発生しました。その地域では、BPBD (BNPB 国家災害管理局) を訪問し、特設職員からお話を聞きました。障害をもつ人々や避難が大変な高齢者・子供・妊婦への対応がどのようにされているかを質問しました。地区ごとに、避難時に支援が必要な人々のリストがあり、車などで優先的にかつスムーズに避難できるよう配慮されているとのことでした。インドネシアは地域の人々の連帯感が強いと感じました。日本と比較すると、システムは整っているのにもかかわらず、保護者が子の障害の公表を希望しない場合がある等、個人情報保護の問題が弊害となり、スムーズではないこともあります。災害発生時や緊急時に、その地域コミュニティのあり方は日本社会では大きな課題であると思いました。日頃の訓練においても、地域住民全体での参加が重要であり、都市型の地域では地域のつながりを意識すべきだと考えます。

また、BPBD の2階には多く最新の機器が並んでいる特別な部屋を見学させて頂きました。多くのモニターが並んでおり、随時火山の状態や街の様子を観察がされている様子でした。また、火山内の溶岩の様子も監視され、火山噴火の危険予測が可能とのことでした。緊急時には、このモニターを見て、会議を開催し避難指示が出されるとのこと、時として、この部屋で寝泊まりし会議が行われるとも話していました。1階では自家発電が可能な車や支援物資などを見学しました。災害時の支援物資を直にみたのは初めてで、とても興味深かったです。様々な物資ボックスがあり、乳児がいる人用の箱、子供がいる人用の箱、食器が入っている箱、食料が入っている箱などがありました。それぞれの箱に被災者に必要なものが考えられて詰められており、実用的だと思いました。また子供のおもちゃが詰められている箱は、長期の避難生活が配慮を感じました。災害発生時のロジスティックセクションがどのようなシステムで動いているか気になりました。サマーコースでマーシーマレーシアの方が災害リスクマネージメントについて講義があった時に、ロジスティックのシステムやト

レーニングについてどうされているか疑問に思ったので質問したところ、施設ごとにトレーニングマニュアルがあるとおっしゃっていました。調べてみると、日本では、日本災害医療ロジスティック研修が行われているようで、様々な職種の方が参加されており、内容としては講義と災害を想定した実践研修です。私は、医療職ではありませんが、災害の際 DMAT メンバーには含まれていないことの多い職種ではありますが、ドクターやナースなどの医療スタッフの状況がわかる利点をロジスティックセクションで活かすことができるかもしれないと考えました。ぜひ、機会があればこの研修に参加してみたいと思いました。

メラピ山は、2010 年の大噴火災害後、政府による居住制限がかけられました。その地域に住んでいた住民は、元々住んでいた地域に住むことが出来ず、避難所のシェルターから仮設住宅、Huntap と呼ばれる集団移転地にある恒久住宅へ移り住みました。私は、この Huntap を訪れ、住人にインタビューをする担当でした。ガジャマダ大学の学生が通訳をしてくれてインタビューは実施されたが、聞きたいことはおおよそ質問できました。サマーコースの事前学習で、阪神・淡路大震災の語り手の方が触れていた課題として、災害後に復興時における被災者の居住状態におけるソーシャル・キャピタルに興味があったので、それに関する質問もしました。地域の人と結びつきが強いインドネシアでは、政府が行った集団移動による住宅再建である Huntap 型が成功した大きい要因であると考えます。実際に、インタビューをした住民の方も、村ごと移動できたことは復興の際に大きな利点があったとおっしゃっていました。また、現在共同で会社を作り、仕事をしていると話していました。住民によると、現在、昼間は元の住居に毎日通っているが住む場所は Huntap であること。以前の住居は広くて良かったが、ハザードマップなどで危険があることは理解しているので、元の場所に住めないことも理解しているとのことでした。また、政府は十分な住居を与えてくれ、仕事も以前より給料が良く、結果的には今の生活に不満はないと述べていました。ハザードマップは危険度を客観視ですることができ、災害時の避難場所の把握だけでなく、災害程度についての住民への理解にも有効であると思いました。日本における運用は、地域住民との関係性が違うこと、被災の程度の差違による政府からの支援金の金額が違うこと、まとまった土地の確保が困難などの課題もあり、すべての被災者にそのまま適用は難しいですが、1つの選択肢として、集団移転は重要な要素であると考えます。

ユネスコチェアサマープログラムのテーマが災害におけるジェンダーと脆弱性ということで、いつもは医療の視点で災害を見るが多かったのですが、ジェンダーという違った視点で捉える機会が多かったように思います。災害時の支援物資が入った箱に、女性が育児をしやすいように必要なものが揃っていたのが印象的でした。また、BPBD を見学した時も、女性リーダースタッフから説明していただき、女性が活躍されていることが見受けられました。ロニー先生の講義の中で、日本、台湾、インドネシアの中で女性の大学教員の割合の比較について触れていました。統計的に、日本の女性リーダーが世界的にとっても低いことは知識として知っていましたが、実際、他国の学生から実情を聞くとショックは大きかったです。文化や歴史の違いであるなど理由は多々あると思いますが、女性リーダー増えることは女性にとって心強いことです。災害時においても、男性だけでなく、女性のリーダー存在することは、女性の被災者にとって心強いことであると思います。今回のプログラムではワークショップも多くあり、チームメンバーと災害の与えられた様々なシチュエーションについてディスカッションする機会が多く、避難所について議題になったときは、女性や子供、高齢者への配慮が着眼点になりました。また、プライベートの保護の配慮も避難所での女性の生活に重要な点であり、ストレスが多い避難所での生活に配慮が必要だと考えます。インドネシアではムスリムの方が多く、女性のプライバシーについては配慮について重要だという意見が多かったです。

サマーコースでは数多くのディスカッションをし、プレゼンテーションを行いました。シチュエーションを与えられることで、実践を意識し考えることができました。異なる背景、文化の学生と話し、学ぶことがとても沢山ありました。普段から、広い視点でものを見る力を養うことが重要であり、災害時にも、それが活かせるようになることで、ジェンダーに敏感な災害対策に繋がると思います。

#### 参考文献

- ・災害後のコミュニティ移転に関する制度と移転パターンに関する研究：インドネシアメラピ火山災害後の事例に着目して 2井内 加奈子 公益社団法人都市計画学会 都市計画論文集 Vol.50 No.3 2015 年 10 月
- ・第 1 回日本災害医療ロジスティック研修報告 岩手医科大学災害時地域医療支援教育センター [http://www.iwate-med.ac.jp/saigai/training/logistics/docs/report\\_1st-logi.pdf](http://www.iwate-med.ac.jp/saigai/training/logistics/docs/report_1st-logi.pdf) ( 2019/9/20 検索)
- ・集団移転等による住宅の移転・債券をめぐる課題 三宅 諭 農村計画学会誌 Vol31.No.4 2013 年 3 月